



今月の
選者

安岡 孝一 (京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター)

常用漢字は日々変化している

情報管理. 2017, vol. 60, no. 3, p. 208-210. doi: <http://doi.org/10.1241/johokanri.60.208>

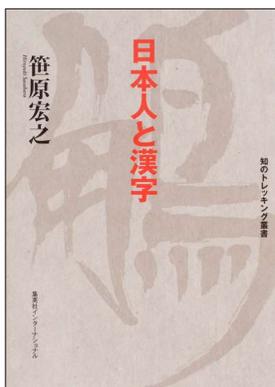
2017年の3月に『日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード』と題する書籍を出版した。出版したとはいっても、版元は京都大学未踏科学研究ユニット・学知創生ユニット・人文科学研究所で、いわば研究報告書というスタイルである。内容は、日本の常用漢字表2,136字と、中国の通用規範漢字表の一級字3,500字と、台湾の常用国字標準字体表4,808字と、香港の常用字字形表4,762字と、韓国の漢文教育用基礎漢字1,800字を、それぞれ漢字コードも含めて対照させる、という無謀な試みだったりする。この『日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード』を書くにあたって、非常にインスパイアされた本があったので、本誌の読者にも、お薦めしようと思う。

日本人と漢字

1冊目は『日本人と漢字』。目次を見てみよう。

第1章 変化し続ける漢字

第2章 中国での漢字の誕生と変遷



『日本人と漢字』

菅原宏之著
集英社インターナショナル
2015年, 1,100円(税別)
<http://www.shueisha-int.co.jp/archives/3551>

第3章 日本の漢字の変化と多様性

第4章 日本人による漢字への思い入れと手入れ

第1章のタイトルにもあるとおり、変化し続ける漢字が本書のテーマである。漢字は、誕生して以来、ずっと変化し続けてきた。まずは甲骨文字において、漢字から別の漢字が派生し、展開していった。「木」を並べて「林」ができた。「女」に、胸を表す点が2つ付いて「母」ができた。「羊」と「大」を上下に重ねて「美」ができた。秦の始皇帝は「皐」という字を嫌って、同音の「罪」という別の字をあててしまったために、「罪」の意味がそれまでとは変わってしまった。インドから仏教が伝来すると、「マ」という音を表す字が必要となったが、どうも「麻」では弱いので、「鬼」を加えて「魔」という字が作られた。北方の鮮卑は、くつ^{せんび}のことを「クワ」に近い音で呼んでおり、それを表すために「革」と「化」を合わせた「靴」という字を作った。

こんな風に漢字はどんどん変化しており、その変化が日本でも続いている、というのが本書の主張である。「蝦」が「海老」から「蟪」そして「蛸」へと変化し、日本の地名や人名に定着する。「第」が「才」に変化する。「圓」を大胆に省略した「円」は、室町～江戸時代を生き延び、当用漢字表に正式採用された。「輕」は「軽」を経て、さらに「聖」へと変化した地域すらある。日本の漢字は、これまでずっと変化してきたし、これからも変化を続けるのだと、本書は熱っぽく、論を進めている。

その一方で、韓国の漢字政策にも、本書は触れている。ハングル専用政策により、「防火」も「放火」も同じ「방화」になってしまって、単語を見ただけで

は判断がつかない、と本書は指摘する。ハングルは音だけを表すために同音語の区別ができず、深刻な誤解や事故が実際に起きているそうだ、と本書は語る。ただ、実のところ、韓国においても言語の変化は続いており、現代において「방화」は、「放火」の意味に限定されつつある。「防火」にあたる韓国語は、現在は「화재예방」(火災豫防)であり、同音語を避けた形へと変化しつつあるのだが、本書はその点には触れていない。

常用漢字の歴史

お勧めのもう1冊は『常用漢字の歴史』。目次を見てみよう。

- 序章 常用漢字とは何か
- 第1章 漢字制限の歴史
- 第2章 さまざまな常用漢字表
- 第3章 字体をめぐる問題
- 第4章 音と訓とはどのように決められたか
- 第5章 常用漢字は常用されてきたか
- 第6章 今、漢字はどう使われているか
- 終章 日本語と漢字

江戸時代の常用漢字は、どういうものだったのか。本書はそこから説き始め、明治、大正、昭和へと続く常用漢字の歴史を説き起こし、そして、平成の常用漢字表は本当に常用されているのか、という問題へと迫る。

1873(明治6)年に編纂された『新撰字書』は、

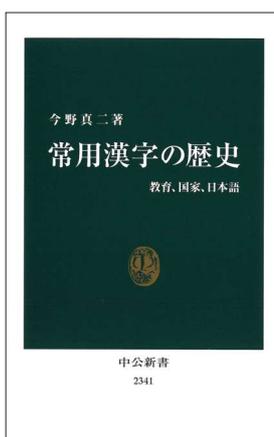
世間で広く使われている漢字3,167字を取録していた。「擧」(ふたご)や「鑽」(ひうちがね)といった字が、当時、広く使われていたことがわかる。しかし、「世間」が変われば、常用される漢字も変わる。ヒウチガネが使われなくなり、マッチへと置き換えられていくにつれ、「鑽」という字も使われなくなっていく。常用漢字は社会を映す鏡でもある。

常用される漢字の字体も、時代によって変わっていく。「禮」は「礼」になり、さらに「礼」になった。「場」と「場」は、明治時代には「場」がむしろ多用されていたが、昭和～平成は「場」が常用漢字である。「歴」の略字は、「麻」が好まれた時期もあったようだが、現在は「歴」が優勢である。ただし、固有名詞に関しては、いくら常用漢字が「吉」であっても、「吉」を使いたいという心性が生じる。「吉」で代表させましょう、という考え方が、固有名詞については、なかなか受け入れられない、と本書は指摘する。

その一方で本書は、ローマ字運動やカナモジ運動も追いかけている。ただし、これらの話題に関する本書の記述は、少し雑である。「日本のろ一ま字社」と「日本ローマ字会」を混同したり、「仮名文字協会」の山下芳太郎を住友商事(1952年設立)の理事としたり、ところどころ間違いが散見される。これらの話題については、本書の最後に示されている各参考文献を、参考にすべきだろう。

日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字

そして『日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード』。目次を見てみよう。



『常用漢字の歴史:教育, 国家, 日本語』

今野真二著
中央公論新社, 2015年, 860円(税別)
<http://www.chuko.co.jp/shinsho/2015/09/102341.html>



『日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード』

安岡孝一, 安岡素子著
京都大学未踏科学研究ユニット・学知創生ユニット・人文科学研究所,
2017年, 非売品
<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/218381>

はじめに

漢字の標準化

漢字コードの標準化

日本の漢字施策と漢字コード

中国の漢字施策と漢字コード

台湾の漢字施策と漢字コード

香港の漢字施策と漢字コード

韓国の漢字施策と漢字コード

日本・中国・台湾・香港・韓国の漢字とその異同

おわりに

付録：

日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字対照表

付録の「日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字対照表」こそが本書のメインであり、それ以前の部分は、付録の内容を理解するための基礎知識として書かれている。時代によって、場所によって、あるいは政治によって、漢字は、どんどん変化していく。その結果として、いわゆる異体字がどんどん増加していく。一方、国民教育を考えた場合、言語の変化は邪魔者となる。教育という側面からは、ある一定の基準を定めて、そのまま変わらずにいてほしい。しかし、それでも何年か何十年かごとに、各国（あるいは各行政単位）は、漢字施策を見直さざるをえない。国民が常用する漢字の種類の変化を、漢字施策は、止めることができないからだ。本書は、各国で変化していった常用漢字がどうなってしまったのか、それを現在という時間断面で切ってみせたものである。

各国の漢字コードは、コンピューターや通信のための技術的な規格でありながら、各国の漢字施策と綿密な関係をもたざるをえなかった。各国ごとに漢

字コードを標準化すると、国内でのやりとりはいいが、国をまたいだ漢字のやりとりには不便である。そこに目を付けたのが、Unicodeだ。時おりしも、インターネットが世界的に発展しつつあり、WWWにおける文字コードは、Unicodeが牛耳っていくことになった。各国が必要とする漢字を、各国が漢字コードとして規定するだけでなく、Unicodeにも提案しなければ使えない、という不思議な時代になった、と本書は指摘する。

なお、本書は商業出版に乗っておらず、市販されていない。デジタル版PDFが京都大学学術情報リポジトリ「紅」で無料公開されている (<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/218381>) ので、そこからダウンロードしてほしい。それでも、紙媒体による本書の所蔵を、どうしても希望する各図書館は、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センターに、問い合わせしてほしい。



安岡 孝一（やすおか こういち） yasuoka@kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp

1965年生まれ。京都大学博士（工学）。京都大学大型計算機センター助手、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター助教授などを経て、2015年より京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター教授。人文科学と情報科学の橋渡しをすべく、文字コードや拓本やQWERTY配列の歴史など、多彩な分野で研究中。